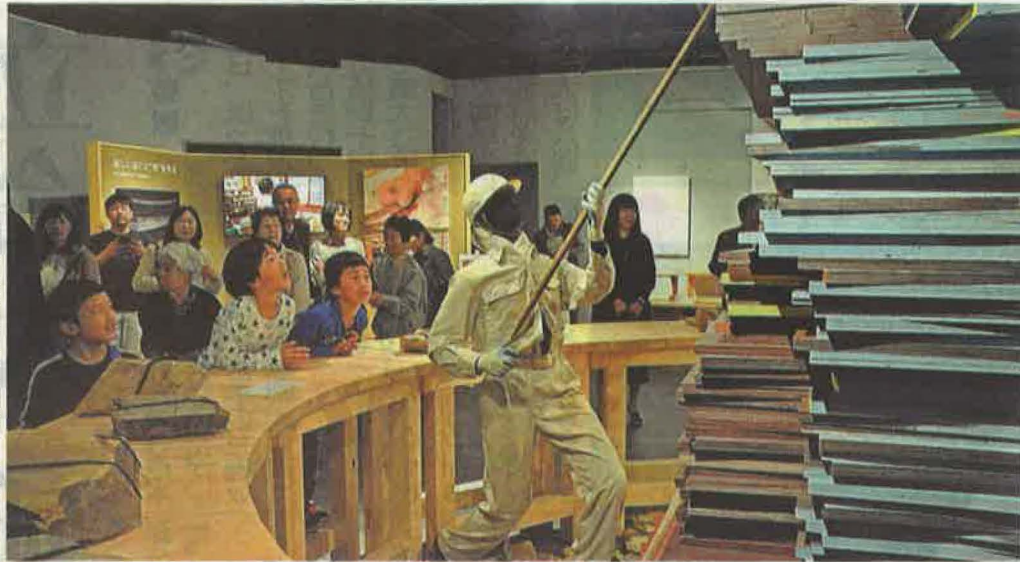


亀岡産天然砥石発信へ



「森のステーション」で展示

亀岡市は全国有数の天然砥石の産地で、古くから日本刀や木工芸、和食などの発展を支えてきた。市は昨年、砥石をはじめ特産品を紹介してきた。市は昨年、砥石をはじめ特産品を紹介する展示・体験施設「森のステーション」をおか」を宮前町に開設した。伝統文化をいかにPRし、保存や継承につなげるか、今後の展開に工夫が求められる。(森大樹)

イベント工夫、集客を

市八木町まで鉱脈が走り、それぞれの地域で採掘が盛んだった。しかし戦後、安価に大量生産できる人工の砥石が急速に普及し、職人たちは相次いで姿を消したという。

貴重な地域資源に注目してもらうため、施設では土橋さんらが所有する砥石約300点を一堂に展示する。来場者は、粒子の細かさが異なる荒砥

同施設は、地域資源をまちづくりに生かすため昨年10月にオープンした。今年4月には職人の技を伝える「匠ビレッジ」を施設内に整備し、天然砥石などの展示を始めた。

「目の肥えた料理人や大工が見ても十分に楽しめる」と土橋さんはアピールする。研ぎ体験コーナーでは、主婦らが家庭の包丁を持ち込み、専門家の指導を受けながら鋭い切れ味に挑戦するなどして好評という。

展示スペースには、東本梅町の採掘現場を再現した高さ約4層のオブジェを設置している。職人に見立てた人形を使い、山の中で岩石をそぎ落とす様子を紹介している。

かつて府内では、京都市右京区から愛宕山を経て、東本梅町や南丹

一方、観光客のほか市民でも砥石が特産品と知

らないう人は多く、情報発信が課題になっている。運営側の人員や予算に限りがあるため、イベントの開催などに十分に手が回せないことも懸念材料だ。今後は、ほかの観光資源や市民活動などとも連携し、産地ならではの魅力に直接触れてもらう機会を増やす必要があるだろう。

運営に携わる「京都・亀岡 天然砥石館」は、子どもたちがカンナを用いて箸をつくる企画などを検討している。上野大成館長(59)は「日本文化を陰で支えてきた砥石にスポットを当て、亀岡のとおきおきの観光資源として世界に発信していきたい」と話している。

丹索

2017

亀岡市内の砥石の採掘現場を再現したオブジェに見入る親子連れ(同市宮前町)